平成１３年７月２３日
第１４２回『２１世紀塾』参考資料
（第１３回提言）

# 「子孫にツケを残さず」だけでいいのか

『２１世紀塾』代表世話人　小野　徹

【問題提起】

いつの間にか、遠い先のことだと思っていた「２１世紀」になってしまった。

そんなせいか、今、こんな『思考方法』なっている。

――「あと５０年たったら、どんなになるんだろうか。５０年たっても、まだこんなものなんだろうか」といった具合だ。

例えば、あと５０年もたてば、家庭の中には、「アイボー」のとんでもなく進歩したロボットが入っているだろう。

人間自体も、「人造部品・移植器官だらけ」のサイボーグに近いものになっているだろう。

――すごい進歩だ。

が、当社が関係する社会資本という面ではどうだろう。

対向車が、センターラインという頼りない一本の区画線を越えて来れば「それまで」という、相変わらず自分の命は見ず知らず他人に握られたままではないだろうかと。

５０年たっても、子供たちは「歩道」という名の区画線の引かれた側溝の上を歩いて、学校に通うのかと。

今を生きている我々には、５０年先を見越して、それらを解決しようとしなかった、何もしてやらなかった責任は問われないのだろうかと。

自民党総裁選に出馬した亀井静香氏（前政調会長）は、後先考えぬ「バラマキ派」で、国を危うくするとして、マスコミや世間の糾弾を受け、惨敗してしまった。

今では、小泉総理の圧倒的な人気の前に、影まで薄くなってしまったが、氏の公共事業や住宅減税を中心とした、一見なりふり構わぬ景気浮揚策の中に、考えさせられる「哲学」があった。

その「哲学」をやや簡略化した図式で言えば、

――国や地方が６６６兆円の国公債残高という膨大な借金を抱える中で、

「子供の時代に借金を残すな」

という世の常識的な批判に対して、

「借金が何だ。ここで景気後退に歯止めをかけなければ、デフレ・スパイラルに陥って、借金どころか、日本そのものが沈没してしまう。

それに、ここで投資した社会資本は、子や孫も、長い将来にわたって、それを使う恩恵を受けるんだから、子や孫にもそれなりの負担があったって、しかるべきだ」

というものであった。

亀井氏は、普段から物議をかもす言動が多く、これも「極論」「暴論」として片付けられた格好になっているが、個人的レベルで考えても、例えば２世代住宅のローンを親子で負担している例もあることだし、よくよく考えてみれば、全く的外れとうことではない。

確かに、借金などなければ、それはそれにこしたことはないが、借金といったって、日露戦争時の米英のユダヤ資本からであるとか、東名高速道路にような世界銀行からといった、外から借りたものではなく、いわば身内からの借金ではないのか。

翻って、「何故その借金が生まれたか」と考えれば、消費者を諸外国に比べ低く押えるなど、国民からいただく税金をできるだけ少なくして、その分、借金が重なったのではなかったか。

勿論、無駄な投資が勧められる訳ではない。

しかし、世界第２位（！）の経済力を持っている今を除いて、いつ、社会・生活基盤、産業基盤整備をするというのか。

何らかの理由はあるだろうが、軍事力を増強しては周辺を威圧する隣の覇権主義国に対してまで、莫大なＯＤＡ予算をバラまいておいて、一方では、財源がないからといって、国内の整備は遅れてもいいというのか。

だから、考えてみよう――「確かに子孫にツケを残すのも申し訳ないが、それなら、あなたがたは、経済力で世界第２位にも登りつめていながら、これにふさわしい、将来に備えた、子孫のための社会資本を、残せたのか？」と。

例えば、いかに所有権を盾にしての反対が多かったからといって、首都圏には、成田という遠方の、滑走路はたったの１本（！）で、それも夜間離発着ができないという「国際空港（！！）」で、２１世紀のグローバル競争を勝ち抜くつもりだったのかと。

私が業界人であるから、厳しい目で見てることはあるかも知れないが、こと社会資本のストック・蓄積に関しては、一般には常識とされる「望ましい整備水準になって

いる」とはうらはらの、将来に禍根を残すたどたどしい行政が続いてきたのではないだろうか。

少し前に聞いた話しでは、日本では「子供に、親と同じ苦労をさせまい」とするのを、「親として当然の心情」だと捉えられているが、まだまだ貧しいブラジルなどでは、親は「自分たちが苦労しているんだから、子供が苦労するのは当たり前だ」と考えているという。

これは、先に取り上げた亀井氏の「哲学」で言えば、「お父ちゃん、お母ちゃんが全部やっといてあげるから、子や孫はタダで使えなんて、親バカみたいなことを言うのはおかしいんだよ」ということにも通じる。

そういえば、幕藩体制をひっくり返して、近代日本の骨格づくりに奔走した西郷隆盛は、「子孫に美田を残さず」と言ったのではなかったか。

その心はといえば、――自分たちが明治新政府の一大権力者になったからといって、内外には課題が山積している。だから、子供たちには安逸な道を用意するのではなく、「これからの日本の為に、自分たちも苦労したんだから、子供たちにも、それなりの努力をしてもらわなくては」の気持ちではながったろうかと、改めて納得する次第だ。

今を引き継いだ自分たちの世代も、次世代の為に、やれることは頑張ってやる。

――それによる「ツケ（！」」もたくさん残るだろう。

しかし、次を担う子供たちは、我々の志を継ぎ、いかなる困難が待ち受けようとも、打ち負かされることなく、立ち向かっていって欲しいと願う――それこそが本当の『親心』というものではないだろうか。

（注）成田では４月１８日から、2,180mという極端に短い横風用の暫定滑走路の供用が開始された。